

## 冬を暖かく過ごす道具

あんか こたつ ひばち かいろ  
- 行火、炬燵・火鉢・懐炉 -

冬を快適に過ごす道具には、ストーブや炬燵だけでなく、今ではエアコン、電気カーペット、床暖房など、さまざまな暖房器具があります。熱エネルギーも、かつてはほとんど炭だったのが、より安全な電気やガスに変わりました。けれども、日本で古くから使われてきた道具を見つめ直していくと、今に通じる工夫や、そこに込められた人間的な温かさを垣間見ることができます。

### あんか 行火

持ち運びのできる暖房具。多くは瓦製で、中の火入れに炭火・炭団<sup>たどん</sup>などを入れ、蒲団<sup>ふとん</sup>をかけて、手足を温めます。江戸時代、市中の辻<sup>つじ</sup>に設けた番所で用いられたことから、「ツジバン」とも呼ばれました。他に猫火鉢・猫炬燵などの呼び名があります。



まめたん 豆炭行火 岡崎むかし館 蔵

### やぐらこたつ 櫓炬燵

室町時代、囲炉裏<sup>いろり</sup>の火を小さくして灰をかけ、その上に小さな竈<sup>すのこ</sup>状の台を置いて暖をとったのが炬燵の始まりといわれています。江戸時代になると、櫓<sup>やぐら</sup>に組んだ台に蒲団をかけて使うようになり、これを櫓炬燵といいました。また、取っ手のついた火入れを櫓の中に入れて、転がしても火入れがひっくり返らないようにしたものを「安全炬燵」といいました。昭和30年代以降、電気炬燵が一般的になりました。



岡崎むかし館 蔵

### ひばち 火鉢

灰を入れ炭火を起こして暖房や湯沸し<sup>ゆわか</sup>に使う暖房具です。鉄瓶<sup>てつびん</sup>や土瓶<sup>どびん</sup>などを載せる五徳<sup>ごとく</sup>や、炭火を調整する火箸<sup>ひばし</sup>が、中に入れてあります。土製のほか木製・金属製・陶磁器製などがあり、大きさもさまざまです。陶器が発達した江戸時代、庶民の間にも身近な手焙<sup>てあぶり</sup>の器具として広まりました。昭和30年代後半以降、石油ストーブにその座を取って代わられました。



岡崎むかし館 蔵

### ハクキンカイロ

「懐炉<sup>かいろ</sup>」とは、文字通り懐<sup>かい</sup>中<sup>ちゆう</sup>に入れてお腹や腰を暖める携帯用の暖房具です。今ではカタカナで「カイロ」と表記し、金属の酸化反応を利用した使い捨てタイプのものが一般的ですが、古くは焼き石を布でくるんだもの（温石）や、瓦を塩でくるんで焼いたものなどがありました。灰を固めて金属性の入れ物に入れる懐炉が登場したのは江戸時代半ば頃で、揮発油を使ったタイプが作られたのは昭和10年ごろです。



岡崎むかし館 蔵